

昔むかし、大むかし。

ペルシアの国に、シャー・アバスという皇帝がいました。

シャー・アバスは、いつも、夕べの祈りが終わると、おしのびで街に出かけ、人びとがどんな暮らしをしているのか見て歩きました。

あるとき、シャー・アバスは、町はずれまで来て、一軒のみずぼらしい小屋の中に、たいへん美しい娘がいるのを見つけました。たちまち、シャー・アバスは、娘のことが好きになりました。

あくる日、シャー・アバスは、召し使いにたずねました。

「町はずれのあの小屋はだれのものだね」

召し使いは答えました。

「貧しい羊飼いが住んでおります」

「羊飼いは子どもがいるかね」

「娘がひとりおります」

「そうか。わしは、その娘が気に入ってしまった。結婚したいと思う。さあ、行って、娘にそのことをつたえてくれ」

召し使いやお付きの人たちは、はじめのうち、本気にしませんでした。けれども、シャー・アバスが何度も「行け」と命令するので、信じるよりほかなくなりました。召し使いたちは、羊飼いの小屋に出かけて行きました。

羊飼いとおかみさんは、話を聞くと、気を悪くしていました。

「あなたがたは、わしらを笑いものになさるのかね。たしかにわしらは貧しいが、あなたがたと同じように、神さまに造られたものですよ」

召し使いたちは、シャー・アバスは本気だと、ふたりを説きふせました。すると、娘がいました。

「シャー・アバスは、何か手に職をお持ちですか」

「いいや、手に職はありませんなあ」

すると、娘はいいました。

「手に職のない人は、何の役にも立たないものです。特別な技術を身につけていないなら、シャー・アバスとは結婚しません」

召し使いたちが城にもどって、娘の返事を伝えると、シャー・アバスは、たいそう喜

びました。そして、娘への愛がいつそう強くなったので、何か手に職をつけるために勉強することになりました。

シャー・アバスが身につけたのは、黄金の布を織る技術でした。

シャー・アバスは、技術を身につけると、娘に、黄金の布を届けました。娘は布を見ると、シャー・アバスをいとおしく思い、結婚を承知しました。

ふたりが結婚してしばらくたったころのことです。

ある日、シャー・アバスは、夕べの祈りが終わると、いつものように、おしのびで街に出かけていきました。すると、一軒の酒屋が、おおぜいの客でにぎわっていました。

シャー・アバスは、その店の戸をたたきました。

「だれだね」と、店の主人がたずねました。シャー・アバスは、

「旅の者だ」と答えました。すると、戸が開いて、部屋にまねき入れられ、テーブルに食べ物が出されました。ところがそのとき、足もとの床が落ち、気が付くと、シャー・アバスは、丸天井の地下室にいました。そこには、ほかに男が三人とらわれていました。シャー・アバスは、男たちにたずねました。

「あの連中は、なぜ、わたしたちをこんな地下室に落としたんだろう」
男たちはいいました。

「あいつらは、人間の肉を羊の肉に混ぜて食べさせる悪党だったんだ。おれたちも、二三日のうちに殺されて、羊の肉に混ぜられてしまう。ああ、シャー・アバスがこのことをご存じだったらなあ」

シャー・アバスは、

「シャー・アバスが知ったら、やつらの皮をひんむいてくれよう」といいました。

男たちは次つぎに引き出されていって、羊のように殺されました。とうとう、シャー・アバスの番になりました。両足をしばられ、ナイフのどを突かれるというとき、シャー・アバスは、さげびました。

「わしは、手に職があるんだ。おまえたちにうんと金もうけさせてやる」

酒屋の主人は、

「よかろう。だが、おれたちをだまそうなんて考えるんじゃないぞ。仕事が終わったら、そのあとで殺してやるからな」といいました。そして、布を織るのに必要な道具をそろえて、シャー・アバスを地下室に閉じこめました。

シャー・アバスは、黄金で着物のへり飾りを織りあげました。それを酒屋の主人に渡していました。

「これを、シャー・アバスのお妃のところへ持っていきな。きつと買ってくださるだろう」

主人は、ひとりの男の子に、へり飾りを持って行かせることにしました。シャー・アバスは、その子に、こつそりいいました。

「お妃に、だれがこのへり飾りを織ったのかときかれたら、酒屋の主人だと答えるんだ。そして、もうひとつ同じへり飾りを織ることができるといふんだぞ」

男の子は、城に出かけて行って、お妃に黄金のへり飾りを渡しました。お妃は、へり飾りを見て、すぐにだれが織ったのか悟りました。そこで、金貨四十ルーブルをわたしで、男の子にいいました。

「酒屋の主人に、もうひとつ同じへり飾りを持ってきたら、五十ルーブル支払うと伝えなさい」

それから、酒屋のありかを聞き出しました。

男の子が帰ってくると、酒屋の主人はたいそう喜んで、

「こいつはすばらしい。おれたちは、大もうけできるぞ」とさげびました。

いっぽう、お妃は、家来たちにいいました。

「明日の朝早く、武器を持って集まりなさい。シャー・アバスは、ご病気なので、頭に白い包帯ほうたいををまいて出てこられるであろう」

あくる朝、お妃は、シャー・アバスの着物を着て頭に白い包帯をまきました。そして、家来たちを引き連れて、酒屋に行き、地下室から夫を救い出しました。悪党どもは、ひとり残らずとらえられて、処刑しよげいされました。酒屋の財産は、すべて、あの男の子に与えられました。

シャー・アバスの身に起きたことは、人びとのあいだに広まりました。シャー・アバスは、ますますお妃を愛するようになりました。そして、いつも、こういうようになりました。

「人は、手に職がなければならん。わしも、手に職を持っていなければ、殺されているところだった」

村上郁再話

資料『世界の民話20』小澤俊夫編訳／ぎょうせい